門前第2遺跡で旧石器出土!!

試掘調査中の門前第2遺跡から、約80点の旧石器が発掘されました。「県内最古」「鳥取県の旧石器文化研究の扉を開く」等々と、新聞紙上をにぎわせたこの遺跡の、発掘速報をお届けします。

町教育委員会では、県営畑地帯総合整備事業に伴う、遺跡の有無や埋蔵状況を確認するための試掘調査を、門前集落の西側の丘陵上に所在する門前第2遺跡でおこなっています。

このほど、試掘の穴から黒曜石の破片が約80点以上も出土しました。これらは、今から2万5千年以上前の旧石器時代の地層から出土したものです。

▲このトレンチから、約80点の旧石器（黒曜石の破片）が発掘されました

この発見は、4つの価値をもつ、非常に貴重なものです。

1つに、鳥取県内で、初めて確認された旧石器時代の石器群（遺構）であるということ。

2つに、山陰地方で、最古相の石器であるということ（後期旧石器時代前半）。

3つに、石器を製作した跡がそのまま残っていること。

4つに、その中には、ナイフ形石器が10点ほど出土し、その当時の石器の様相を知る貴重な資料になること。

などがあげられます。

ところで、旧石器時代とは、今から、約1万2千年以上前の時代を言い、まだ土器を持たなかった時代です。

氷河期の終わりにあたり、もっとも寒い時期で、南極や北極の氷が発達したため、現在よりも海水面が相当低かったと言われています。

その時期の人々は、ナウマンゾウやオオツノジカ、ヘラジカなどを追い求めて移動を繰り返しながら、狩猟生活をしていたと考えられています。そういった営みを、きっと、門前第2遺跡でもおこなっていたことでしょう。

その当時の姿を、みなさんも想像していただければ、面白いのではないかと思います。

本格的な発掘調査が開始されれば、更なる発見があるかもしれません。ぜひ注目していてください。

▲県営畑地帯総合整備事業にともない試掘調査がおこなわれていた、門前第2遺跡

門前第2遺跡　旧石器出土状況

発掘現場から㉗

家のかたち、家族のかたち ～名和飛田遺跡の竪穴住居～

鳥取県教育文化財団埋蔵文化財センター
名和調査事務所

発掘調査では、昔の人々が造った建物の跡や生活の痕跡が様々な遺構として見つかります。人々が実際に住んでいた住居の跡が見つかることも珍しくなく、名和町内でのこれまでの調査でも数多くの住居跡が見つかっています。一言で住居と言っても、時代によってつくりは様々ですが、古い時代の遺跡で見つかる代表的な住まいのかたちは竪穴住居です。竪穴住居とは、地面を掘りくぼめてその上に屋根をかけた半地下式の住居で、縄文時代の初め（約1万年前ごろ）から7世紀ごろまで家族の住む一般的な住居として使われていました。

現在調査中の名和飛田遺跡でも、これまでに古墳時代終わりごろ（6世紀末）の竪穴住居跡が2棟見つかっています。形はどちらも正方形ですが、大きさが異なっています。一方は一辺が5.5mで一般的な大きさです。もう一方の住居は一辺が7m近くあり、竪穴住居のなかでは大型のもので、床の広さは20畳ちょっとあります。竪穴住居の中は、寝る場所や料理をする場所などがある程度決まってはいたのでしょうが、現代の家の寝室や台所のように壁や扉で仕切られていたわけではなく、部屋はたった一つしかありません。ですから、竪穴住居の中では何をするにもいつも家族が一緒だったことでしょう。このように、たった一つの部屋で寝食を共にしていた家族の関係はとても親密なものだったに違いありません。

現代の私たちは、それぞれ自分たちの部屋のある大きな家で快適に暮らしていますが、彼らほどの家族の絆を築けているでしょうか。こんな風に考えると、私たちには不便で窮屈そうに見える竪穴住居も、なんだかちょっぴり素敵なものに思えてきませんか？

▲古墳時代終わりごろの竪穴住居